In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	行為の自己言及性と時空 ： 人文地理学者のアンソニー・ギデンズ理解をめぐって
Author	泉谷, 洋平
Citation	空間・社会・地理思想. 7 巻, p.2-16.
Issue Date	2002
ISSN	1342-3282
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	
DOI	10.24544/ocu.20180105-056

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

空間・社会・地理思想 7号 2-16頁, 2002年
Space, Society and Geographical Thought

行為の自己言及性と時空
―人文地理学者のアンソニー・ギデンズ理解をめぐって―

泉谷 洋平*

Yohei IZUMITANI
Self-referentiality of action and time-space:
(re)thinking the human geographer's understandings of Anthony Giddens.

I はじめに

英国の社会学者アンソニー・ギデンズ（Anthony Giddens）が構造化理論を提示してから，20 年近い歳月が流れた [1]。この間，人文地理学における大きな流の一つとして，ギデンズから少なからぬ影響を受けたスリフト（Thrift, N.），ディアー（Dear, M.）らの地理学者を中心に Environment and Planning D: Society and Space 誌が 1983 年に創刊され，これが制度的な基盤となって近年の理論的・思想的研究の隆盛につながった。このことを考えれば，ギデンズは，地理学者ではない社会科学者としては，1980 年代以降の地理学の研究動向に最も大きな影響を与えた人物の一人であるといってよい。その後 1990 年代に入ると人文地理学においてギデンズの名は影を潜めてしまう（Gregory 2000）。しかし，人文地理学とギデンズとの接触を一つの学史的イベントとして振り返るとき，ギデンズに関してあらゆることが論じ尽くされ，消化されたと単純に結論づけることはできない。これには二つの理由がある。

第一に，ギデンズの理論にとって最も重要な概念である「再帰性（reflexivity）」または「構造の二重性（duality of structure）」の含意は，これまで必ずしも丁寧に検討されてこなかった。両者は表裏一体の概念であり，その要点は，「構造は行為の結果であり，同時に媒体である」と表現される [2]。ギデンズの理論がいかに主客二元論を乗り越えているかを理解するには，これらの概念の徹底した理解が必要である。だが，この論点はこれまで必ずしも徹底的に吟味されてこなかった。

第二に，構造の二重性の考え方と時空 [3]に関する議論との理論的な関連性は，これまで十分明らかにはされてこなかった。人文地理学においてギデンズや構造化理論が教科書的に取り上げられる際，構造の二重性と時空の問題とは，ともにギデンズの理論を特徴づける要素として併記されるに止まり，その理論的関連性は明らかにされてこなかった [4]。このことは，構造の二重性と時空とが別個の問題領域として捉えられてしまっていることを示している。しかし，ギデンズの時空に対する洞察は，再帰性や構造の二重性，つまり「構造は行為の結果であり，同時に媒体である」という考え方から必然的に要請されるものであって，両者は切り離して考えられるべきではない。

以上の二点は，これまで人文地理学においてたまたま論じられてこなかったわけではない [5]。むしろこのような見過ごしは，人文地理学が依拠していた暗黙の前提からもたらされている可能性があると筆者は考える [6]。それは，まさに岡田（1993: 195）が

* 京都大学・院

指摘するところの，「構造の二重性という概念を理解しようとする際，われわれが陥りやすい誤り」である（それがいかなる誤りかについては，後にじっくり触れることになるだろう）。したがってこれらの点について論じることには，人文地理学における暗黙の前提にいかなる問題があったのかを明らかにし，同時にその暗黙の前提を相対化する視座を提供する意義をもつだろう[7]。本稿ではこういった方向を意識しながら，再帰性や構造の二重性という考え方の理論的な意味合いを明らかにし，これまで人文地理学で注目されてこなかった時空についての視点を明らかにすることにしたい[8]。

II　ギデンズの理論と行為の自己言及性

ギデンズの議論を掘り下げて理解するためには，構造の二重性，あるいは再帰性とはどのような考え方であるのかをまず理解しなければならない。これらの概念は，哲学，社会科学から自然科学に至るまで数多くの議論を源泉としているが，中でも筆者が特に重視するのは，オートポイエシス（autopoiesis）の議論（特にその論理的基盤を与えているスペンサー＝ブラウン（1987）の論理代数）と，後期ウィトゲンシュタインである。本章ではこの二つを拠り所として構造の二重性，再帰性という概念についての考察を深める。そのための補助線として，まず大澤（1999）の議論を手短にフォローしておきたい。大澤の行為論は後期ウィトゲンシュタインやポスト構造主義，オートポイエシスなどギデンズの行為論と共通する源泉を多く持っている。その中でも大澤（1999）は，特にスペンサー＝ブラウンの算法に徹底して内在しつつ展開されているため，社会科学的考察としては，ギデンズの著作と比べて極めて論理的かつ形式的である。したがって，ギデンズが行為と構造の関係をいかなる論理的基盤に基づいて捉えていたのかを理解する上で，大澤（1999）の議論を参照しておくことは有効であると思われる。

(1) 指し示しの算法と行為の自己言及性

行為において，われわれは常に何かを何かとして対象化している。この「対象化」という営みは，何らかの存在者が存在している領域（空間[9]）に，対象化されるものXと，Xではないものとの区別を設けることに他ならない。この営みを大澤は「指し示し（indication）」と呼ぶ。さらに，Xが存在するということは，そのXをXとして指し示すということである。Xとして指し示すということは，それをXであることが妥当であるものとして指し示すことである。行為においてXを対象化する際に，われわれは常にその対象Xを当の行為にとって妥当なものとして（Xでないものを妥当ではないものとして）指示することになる[10]。そして，対象を妥当／非妥当なものとして区別する営為は，当の営み自身に対する妥当／非妥当の区別をも潜在的に伴っている[11]。このような区別は，行為論や社会理論の文脈で「規則」と呼ばれているものに相当する（大澤 1999: 28）[12]。

さて，このときXを妥当なものとして（XをXとして）区別するような規則R1は，論理的にはXに先行して決定しているはずである[13]。つまり，R1はXに先立って指し示されている。このとき，規則R1をR1として（つまりR1を妥当なものとして）指し示す規則R2が，さらにR1に先行して指し示されていることになる。このように論理的な帰結を追っていくと，あるものが存在するためには，それを妥当なものとして区別する規則があらかじめ指し示されている必要があり，さらにそれを妥当なものとして区別する規則が事前に指し示されている必要があり，さらに…，という具合に，指し示しが無限連鎖を描くことになる。しかし，このような無限連鎖は，有限の経験の内では完結しえない。これがあたかも完結しうるかのように見えるのは，ある任意の指し示しにおいて，その指し示しの前提となる条件も同時に指し示される，とみなされた時である（スペンサー＝ブラウン 1987: 67）[14]。

このような事態は，スペンサー=ブラウンの論理代数においては「想像的状態」，つまり解が虚数となる状態とみなされる。行為が行為として成立するのも，まさにこのような想像的状態においてである（大澤 1999: 43, 78-83, 93-98）。つまり，ある指し示しがそれ自身の前提条件をも指し示すように，行為においては，その行為の前提であるはずの規則は，当の行為自体によって想像的に指し示されているのだ[15]。つまり，あらゆる行為はそれ自身の前提ないし

根拠となるものを，まさに当の行為を通じて想像的に獲得していることになる。この意味であらゆる行為には「自己への準拠」（大澤 1999: 91），すなわち自己言及性が孕まれている。このように考えることにより，無限連鎖の問題はひとまず回避される[16]。

以上がスペンサー＝ブラウンに基づいて大澤が導き出した行為と規則の関係に関する考察である。では，ギデンズはスペンサー＝ブラウンの数学や自己言及の考え方を自らの理論的思考にどう位置づけていたのであろうか。

ギデンズは行為を「再帰性」という表現で特徴づけて理解している。彼によれば「再帰性」とは「自己再生産的組織の特徴」である。そして，スペンサー=ブラウンに言及しつつ，「自己指示の現象［つまり自己言及性］は自己再生産的組織を理論的に特徴づける際の論理的特性であり，矛盾もまた自己再生産的組織の論理的特性である」（ギデンズ 1989: 81）[17]と述べる。ここから，大澤やスペンサー=ブラウンから導き出した，「行為は本来自己言及的であり，行為と規則の間には矛盾的な関係が存在している」という帰結を，（大澤だけでなく）ギデンズも認識していたことが読み取れるだろう（岡田 1996a，b も参照）。

（2）ウィトゲンシュタインと規則のパラドクス

大澤の行為論とギデンズの行為論を結びつけているのはスペンサー＝ブラウンだけではない。両者を結びつけるもう一つの糸が後期ウィトゲンシュタインである[18]。後期ウィトゲンシュタインは，近年の人文地理学における理論的研究の隆盛の中にあって，不自然なまでに黙殺されてきた[19]。そこで以下では，後期ウィトゲンシュタインを参照することによって，これまで（特に人文地理学において）見落とされてきたギデンズの行為論の要点を引き出すことにする。

ギデンズは，構造を規則であり資源であると定義している（Giddens1984: 25，377; ギデンズ 1989: 71）[20]。この定義は，ギデンズにおいては，「規則」が「構造」同様に「客観主義的」な概念として把握されていることを示している。この点を踏まえて，ギデンズの後期ウィトゲンシュタインについての言及を追っていこう。ギデンズは次のように述べる。

> …規則とは［活動についての解釈や，なされるべきことについて述べたものではなく］行為の手続きであり，実践（*praxis*）の側面なのだ。ウィトゲンシュタインが規則および規則に従うことのパラドクスとして初めて開示した問題を解決しえたのは，まさにこの点に言及することによってである。…
>
> そこでわれわれは，社会生活の規則を，社会的実践の遂行／再生産の際に適用される技術，ないし一般化可能な手続きと見なすことにしよう（Giddens 1984: 21.）[21]。

ウィトゲンシュタイン流に言えば，「行為は規則に決定されない」（Wittgenstein 1981: 81〔§201〕）のであって，われわれは行為しながら，当の行為が従っている（ように見える）「規則をでっちあげる」（ibid.: 39〔§83〕）のだ。しかし，これは客体に対する主体の優位（「主観主義」やヒューマニズム）を意味するのではない。なぜなら，「主体」という意味付け自体が既にして「解釈」であり，「規則を表現したもの」の一変種であるからだ。行為が「規則をでっちあげる」ような水準は，そのような「解釈」された「主体」とは無縁である。実際，ウィトゲンシュタインは別の個所で「規則に従うとき，私は選択をしない。私は規則に盲目的に従うのだ」（ibid.: 85〔§219〕）とも述べている。当然これも主体に対する客体の優位を意味しない。ウィトゲンシュタインは，われわれが規則をでっちあげ，次にそのでっちあげられた規則に盲目的に従い…といったことを意味しているのではない。われわれは，規則に盲目的に従うと同時に，そのことを通じて，その規則を成立させている。このことは逆の言い方でも表現できる。われわれは規則を成立させたまさにその時，その規則に盲目的に従っているのである。そして，われわれが規則に盲目的に従うそのとき，われわれはどんな規則に従っているのかを表現することはできない。このような水準には主も客もない行為（実践）があるのみである。ギデンズは行為や実践という言葉にそのような意味を読み込むのである[22]。

また，ギデンズはウィトゲンシュタインに言及しつつ，次のように述べている。

> 「意味を探し求めてはならない，使用を探し求めよ」とは，…言語辞項の意義は，その辞項が表現したり表現されたりする実践のなかでのみ与えられるということだ（ギデンズ 1989: 42）[23]。

われわれはここでの「意味」も「規則」や「構造」に置き換えて理解することができる。意味とは，ある対象をどのようなものとして把握するかに関する規則，と言い換えられるからである。そして，ここでも，実践（行為）と意味（規則）とが実体として分離していてどちらかがどちらかに先行するのではなく，意味（規則・構造）が実践の側面として，実践に相即するものであることが主張されている。言語辞項の意義，つまり規則や意味として「表現されたこと」は，その規則や意味をでっち上げつつそれに従うようにして遂行される行為から離れて，独立に存在するのではない[24]。

では，スペンサー＝ブラウンや大澤，後期ウィトゲンシュタインなどとの接点を念頭に置きながら，構造の二重性や再帰性などの考え方を再構成してみよう。

（3）再帰的モニタリングと再帰的自己規制

ギデンズは行為の本質を再帰性，ないし再帰的モニタリング（reflexive monitoring）という語で表現している[25]。再帰的モニタリングとは，行為者が，主として「暗黙知」（ポラニー 1980）のような言説化できない水準で，その行為を取り巻く文脈を絶えず志向しつつ，行為を他者や客観的世界に関係付けることをいう（Giddens 1984: 5-6, 376; ギデンズ 1987: 226-227, 1989: 44, 61）。このように，主体（行為）と客体（構造）の関係を構造の二重性や再帰的モニタリングという矛盾的関係として捉え返し[26]，主客の区別自体がそこから生じるような水準を実践の本質として見出した点において，ギデンズは主客二元論を乗り越えているといえるのである。

しかし，このようなギデンズの観点は，「主体」→「客体」→「主体」→「客体」…という形で客観的構造と行為主体が相互作用する，ということとは異質である。ギデンズはこのような主客の関係を，再帰的自己規制（reflexive self-regulation）と呼んで，再帰的モニタリングから区別する（Giddens 1984: 200, 376; ギデンズ 1989: 80-81; 岡田 1993: 195）。再帰的自己規制は近代社会に固有の現象であるが[27]，再帰的モニタリングはあらゆる行為に等しく見受けられる。あらゆる再帰的自己規制は再帰的モニタリングであるが，逆は当てはまらない（岡田 1993: 193-197）。

ギデンズは一連の著作の中で一貫して社会システムや行為の再帰性を重視しているが，再帰性とは自己言及性の別名に他ならない。したがって，再帰的モニタリングにおける主客の関係は，先に大澤の議論に沿って確認した，行為と規則のパラドクスが示す事態と並行に理解されるべきである。行為を再帰的なものとして考えるならば，個々の行為（「主観主義的」なもの）に，個々の行為を超えて存在する構造（行為者を超越する「客観主義的」なもの）が入り込むことになる。同時にこのような構造を社会の全体性とみなすならば，社会は個々の行為の成立によって仮構的にしか存在しえない。これに対して再帰的自己規制のような理解においては，「主→客」の局面を見る際に前者の，「客→主」の局面を見る際に後者の契機がそれぞれ見落とされてしまうのである。

それでは，再帰的モニタリングと，再帰的自己規制とでは，時間や空間に対する認識がどのように異なってくるのであろうか。続く章では，まず，行為を自己言及的なものとして理解する視座（再帰的モニタリングの観点）から論理的に導かれる時空認識を明らかにし，その立場から再帰的自己規制の観点と結びついている「時空間」の認識を批判的に捉え返す。

III　時空と時空間

ギデンズはハイデガーの哲学や構造の二重性の観点から，時間を「今」の連続と見なす考え方―これは時間を線的なものとして理解するような観点とも結びついている―に異議を唱えている（Giddens1983: 79）。さらにギデンズは，このような時間認識は，時間と空間を分離し，両者を存在や経験からは独立した空白なカテゴリーとみなす，カント的な認識に連なるものであると考えている（ギデンズ 1998: 193-197）。これはわれわれが日ごろ特に意識せずに前提としてしまっている考え方であり，したがってよほど注意しないかぎり，相対化することの難しい認識である。この点を踏まえて，これ以降はギデンズが批判した「今」の連続としての時間を，「」つきの「時間」として表記する。また，この

ようにして「時間」から分離された次元としての空間こそ，先に「」つきの「空間」として表記したものに他ならない[28]。「時間」とは異なり，時間は空間と切り離して概念化しえないものとして理解される。ギデンズが time-space という語を用いる際には，このような認識が背景にある。ここではまず，時空について論じる下準備として，「時間」と「空間」にとらわれたわれわれの常識的感覚を批判的に相対化するために，ギデンズのテクストに限定せずに，「」のつかない時間に焦点を当てて議論を進めることにしたい。その後で，時空と「時空間」との違いを前章の議論に引きつけて論じる。

（1）時間は実在しない

「時間」とは異なる時間とはどのようなものか。スペンサー＝ブラウンは，空間における指し示しの論理的帰結としての想像的状態＝パラドクスは，空間のレベルをもはや越え出ており，時間の内にあるという（スペンサー＝ブラウン 1987: 67-68; 大澤 1999: 140-141）。これをより具体的に表現するなら，指し示しの論理的帰結としてのパラドクスこそが，時間の体験をわれわれにもたらすのである。そして，大澤によれば，スペンサー＝ブラウンのいう時間もまた，「今」の連続とみなされるような「時間」とは異質である（大澤 1999: 141-142）。後続の議論に対する補助線として，大澤が依拠した議論を参照しつつ，まずは行為と規則のパラドクスと時間との関係を明確にしておこう。

マクタガート（McTaggart 1988）は，「変化」が時間の本質であるという。変化を認知することは，未来であったところのものが現在になり，それがさらに過去になることを認識することである。そして，このような変化を本質とする時間は，経験的なレベルでは実在しない[29]。この論証の帰結は意外な印象を与え，多くの反論がなされたが，およそ考え付く反論はダメット（1986: 370-381）によってことごとく論破されており，マクタガートの提示した論証は正当であることが認められている（大澤 1994: 313, 1999: 140-150）。そうであれば，われわれは，何らかの出来事が「非時間的な関係に立っているのに，それをわれわれが時間的だと誤解するのだ」（ダメット 1986: 380）と考えざるをえない。そして，まさに実在しない時間が現実として体験されるところに，Ⅱ（1）で確認したパラドクスが巧妙に隠蔽されるのである。

ある状態Aがある状態Bへ変化するということは，当然，A と B との間に何らかの意味で差異があることを意味する。しかし，A と B が単に異なるのであれば，われわれはそれを変化とは呼ばない。たとえば，「信号が赤から青に変わった」という言葉が意味を持つのは，赤から青に変わった何ものかが，何ものか（信号）としての同一性を保持しているからである。これに対し，赤い箱と青い箱が並んでいる時に，両者の差異について「赤が青に変わった」というように言及することは，通常意味をなさない。このように同一性が想定されない，同一性をそもそも想定していないようなケースにおいては，「赤が青に変わった」という言明は無意味であり，変化について語ったことにはならない。つまり，ある状況を「変化」と呼びうるためには，二つの事象の間に差異がありながら，なおかつ同一性もが保持されていなければならないのである。

変化を本質とする時間とは，「過去」「現在」「未来」という系列をなす時間である（McTaggart 1988）。いまだ何ものでもない状態としての「未来」は，既に何ものかとなってしまった状態としての「過去」へと変化する。この時，「変化」が「『差異』と『同一性』との間の『同一性』」であるならば，「未来」と「過去」とは同一性を保持していることになる。つまり，その変化が認知される現在において，過去と未来は同時に成立している。実は，この認識は後期ハイデガーが示した時間認識にも通じている。ハイデガーは，ある側面からみれば過去と未来と現在が融合しており，そのような地平にこそ時間の本質があることを指摘している[30]。

ここで指摘した過去と未来の関係は，先に確認した規則と行為のパラドクスと無関係ではない。先にⅡ（1）で，「行為の前提であるはずの規則が，当の行為に先立って成立しているのではなく，当の行為によって指し示されている」と指摘した。同じことを，Ⅱ（2）では，ウィトゲンシュタインを引き合いに出しつつ，「われわれは規則に盲目的に従うと同時に，そのことを通じて，その規則を成立させている」と表現した。この時，「盲目的に従われている」

規則は，それがどのような規則であるか行為者に知られていないにしても，少なくともその行為に先立って既に決定されている先験的な条件として体験されざるをえない。過去というのは，このような「既に決定された」「先験性」を帯びた領域に対してつけられた名である。これとは逆に，「その規則を成立させている」という側面においては，「未だ成立してない不確定なもの」として規則が位置づけられることになる。未来とはこのような未決定性，不確定性に対する名である。そして，規則や構造が主体を制約する契機と，主体が規則や構造を創造する契機が，行為の水準において同時であったように，過去と未来も行為の水準（＝現在）において融合しているのである。

以上のような時間についての洞察は決して狭小な学問的思弁の枠に止まるものではない。

> 三人のきょうだいが，ひとつの家に住んでいる。／ほんとはまるでちがうきょうだいなのに，／おまえが三人を見分けようとすると，／それぞれたがいにうりふたつ。／一番うえはいまいない，これからやっとあらわれる。／二番目もいないが，こっちはもう家から出かけたあと。／三番目のちびさんだけがここにいる，／それというのも，三番目がここにいないと，／あとのふたりは，なくなってしまうから。／でもそのだいじな三番目がいられるのは，／一番目が二番目のきょうだいに変身してくれるため。／おまえが三番目をよくながめようとしても，／そこに見えるのはいつもほかのきょうだいだけ！／…／さあ，それぞれの名前をあてられるかな？／…／彼らはいっしょに，ひとつの国をおさめている―／しかも彼らこそ，その国そのもの！／その点では彼らはみな同じ（エンデ 1976: 203-204。「／」は原著では改行）。

これは，エンデ（Ende, M.）の代表作『モモ』の登場人物マイスター・ホラ（時間を司る仙人）が，主人公の少女モモに出題したなぞなぞである。その答えは，未来・過去・現在の「三兄弟」からなる「時間」である。「三番目［現在］がいられるのは，一番目［未来］が二番目［過去］に変身してくれるため」というのは，時間の本質が「変化」にあるとする，ここでの解釈に符合している。「ほんとはまるでちがうきょうだいなのに，…それぞれたがいにうりふたつ」とは，もちろん，未来・過去・現在のそれぞれが排他的でありながら同一性を保持していることを示している。およそ 12 歳以上を対象に書かれた童話の中に，マクタガートやハイデガーらと共通の理解が示されているのは興味深い。物語の中で少女モモはヒントを与えられながらも，このなぞなぞの答えを見事に言い当てる（そしてこのことは物語にいささかの不自然さも与えていない）。このことは，ここで示した時間への視座が，「時間」と比べていささかも特殊なものではないことを示しているといえないか。

（2）時空と時空間

さて，ここまで時間にかかわるいくつかのテクストを見てきたが，実はそのどれもがギデンズによって直接参照されているわけではない。ギデンズが言及しているのは，ハイデガーのテクストのみである。しかし，このハイデガーこそが，ギデンズの「時間」認識批判のための拠り所を提供しているのである（Giddens1983: 78; ギデンズ 1998: 195）。そうであれば，上の議論が，時間論＝「時間」批判という方向で整合性を持つ限りにおいて，ギデンズのテクストにも同じアイデアを読み込むことができる。すなわち，以上に見てきたような視座から理解される時間を，ギデンズが重視する「『今』の連続ではない時間」とを重ねて理解することができるだろう。では，そのような時間と空間や行為は，どのような関係にあるのだろうか。

ここまでの議論では空間について明示的には語らなかったが，これは上で敷衍した時間認識が空間に対する考察から独立していることを意味してはいない。時間は，既に見たように理論的には行為と規則のパラドクスとパラレルなものとして理解することが可能である。そして，このパラドクスが，「空間における指し示し」としての行為の論理的帰結であったことを思い起こしておこう。指し示しは常に何らかの空間において何らかの存在者を対象化する。他方で，そのような空間の存在は常に指し示しと相関して保証されている。つまり，空間と指し示しは不可分の関係にある。そして，「空間における指し示し」は自己言及性ゆえに決定不可能性を孕むが，時間はその決定不能のパラドクスの体験そのものに他ならない。そして，時間そのものもパラドキシカルな体験であるにもかかわらず，われわれは，過去・

現在・未来が相互に排他的なものであるという認識を自明視することで，そのパラドクスを忘却しているのである。

重要なのは，素朴実在論のレベルではここでいう空間も時間もそれ自体としては把握されえないということである（なぜなら，空間を指し示そうとする営みは空間のレベルだけでは決定不能に陥り，また時間自体の実在の証明もマクタガートやダメットが示したような矛盾に陥るから）。空間と時間は両者同時に，指し示しとしての行為の結果として，行為に先立ってあったかのように体験される。つまり，このような時空と行為の関係には，規則と行為の関係についてⅡで確認したものと同形の自己言及的な関係が，そのまま見出される。時空と行為は実体的に分離してはいない。時空は行為の側面として行為に相即しているのである。ギデンズ自身も，行為と構造（規則）の自己言及的関係という観点から，行為と文脈（＝時空[31]）が相即することを示唆している。ギデンズによれば，（社会）システムとは社会的相互作用の様式であり，実践の再生産である（Giddens 1984: 377）。さらに社会理論（社会科学）は，そのような社会システムを構成する実践（＝行為），あるいは「行為する自己」の本質に迫る問題系によって構成されている（ibid: xvi-xvii）。そして行為が「本質」的に時空と相即しており，互いに不可分な関係にある以上，時間と空間は社会理論の核心とならざるをえない。ギデンズが時間と空間を分離するようにして専門分化した人文社会科学の体制を批判し（ibid: 355-372），時空に対して重要な理論的価値を与える背景には，以上のような認識があるといえる。

以上のような認識は，行為の自己言及性，つまりギデンズのいう再帰的モニタリング（＝再帰性）の観点とセットになっている。そして，再帰的モニタリングと再帰的自己規制という二つの視点の間では，「主体」と「客体」との関係を想定する際に前提とする時空（間）のイメージが決定的に異なっている。それぞれについて，より詳しく説明しよう。再帰的モニタリングにおいては「主→客」と「客→主」の両契機は，同時である。むしろこの同時性に孕まれる矛盾こそ，時空を生む契機なのであった。これに対し，再帰的自己規制においては，空っぽな容器としての「時間」と「空間」とが暗黙のうちに前提され，そのような空っぽな時空間の別々の地点に「主→客」と「客→主」の両契機はばらばらに配分される。つまりここでは，再帰的モニタリングにおいて背反する二つの契機（「客→主」と「主→客」，あるいは過去と未来）が同時に存在するという矛盾は，時空間を所与のものとし，それを分節化して扱うことで無視されるのである（岡田 1997: 423）[32]。このように，分節化した別々の時空間に，主客の両契機を別々の問題系として配分する態度こそ，主客二元論を特徴づける態度に他ならない。

岡田（1993: 195）が「陥りやすい誤り」と表現したのは，再帰的モニタリング（時空）と再帰的自己規制とを区別せず，混同して理解してしまうことなのである。そしてこの両者は，岡田（1993, 1994, 1996a, b, 1997, 2000） が強調するように，ギデンズの読解においてしばしば混同されてきた。人文地理学におけるギデンズの理論の理解もこの例外ではない。しかし，人文地理学のギデンズ理解において再帰的モニタリングと再帰的自己規制とが混同されてしまった背景には，（「空間」概念への固執という）人文地理学独自の要因もはたらいていたように思われる。次章では，人文地理学者プレッド（Pred, A.）とギデンズとのやりとりを通じて，この点について考えてみたい。

Ⅳ　人文地理学者のギデンズ受容
―プレッドを中心に―

（1）時間地理学と構造化論

人文地理学におけるギデンズへの注目度が目立って高まったのは，ギデンズが自身の著作において人文地理学者の著作にはっきりと言及しはじめた，1980 年前後からであると言ってよい。ギデンズ自身は，時空間の問題に関心を抱くようになったきっかけとして，ハイデガーの哲学とともに，人文地理学を挙げている（Giddens 1983: 75-80）。人文地理学の中でも特にギデンズが関心を寄せていたのは時間地理学であった（たとえば Giddens 1984）。したがって，ギデンズの地理学への接触，地理学のギデンズ理解双方において，当時時間地理学に関心を持っていたプレッドとの論争（Pred 1983; Giddens

1983）は重要な意義を持っていたと思われる[33]。そこで，ここではこの論争を中心に議論を進めることにしたい。

プレッドは，ギデンズとともにバスカー（Bhaskar, R.），ブルデュー（Bourdieu, P.）らを「構造化論学派」の代表的論客として挙げつつ，彼らが共有する視点を，次のように整理する。

> …社会化と社会的再生産の同時的展開において，特定の個人と彼／彼女の意識は社会によって形成されるが，他方で社会は，非意図的にも意図的にも，その個人と彼／彼女の意識によって形成される。個人と社会の弁証法的関係，両者の絶えざる生成を扱うためには，物質的な継続性とともに，…実践と構造の弁証法ないし構造化のプロセスとに対処していくのでなくてはならない。そのプロセスにおいて，あらゆる社会システムの構造特性は日常的諸実践の作動の中にそれ自身を表出するが，同時に，その日常的実践が，当の社会システムのミクロ／マクロレベルにおける構造特性を生成し再生産する（Pred 1983: 45. ただし強調は泉谷による）。

この部分から，「社会が個人に作用する契機と，逆に個人が社会に作用する契機とが同時であるという認識が，構造化論の一般的な特徴である」とプレッドが考えていることがわかる。そして，そのような社会（「構造」）と，個人（「実践」）との関係を，プレッドは「弁証法的」であると表現している[34]。

さて，このように前置きした上で，プレッドは，「構造化論学派」には以下のような問題があると指摘する。

> ［彼らは］，…自己と社会，個人と制度の日常的な形成と再生産が，時間と空間における一定の位置において生じ，構造に影響されたり影響したりする特定の実践として表出するようになるありさまを，概念的にうまく説明できていない。…彼らはみな，時間と空間における特定の文化，経済，政治的制度の日常的な機能と再生産が，時間的，空間的にみてある特定の行為，知識の蓄積，特定の個人誌と常に結びついているありようを，われわれに適切な形で示しえていない（Pred 1983: 45-46. ただし強調は泉谷による）。

構造化のプロセス（諸「制度」の「機能と再生産」）は，時空間における特定の行為において表れる。このような行為は，時空間において身体的あるいは物質的な連続性を持った行為者の描くパスの「流れ」の中で生じる。そのようなパスの「流れ」が，さまざまな物質的制約条件によって「一定の位置において」しか生じないということは，時間地理学がさまざまな形で明らかにしてきたことであった。したがって構造化のプロセスにも，このような物質的な連続性や制約性，時空間的な固有性が反映される。このような時空間的，物質的連続性とそれらの制約的側面を構造化論者が把握し損ねているというのが，プレッドの主張の要点である[35]。

このような構造化論の「欠点」は，プレッドが示唆するように，トゥアン（Tuan, Yi-Fu）やレルフ（Relph, E.）ら人文主義地理学者によって議論されてきた「場所の感覚（sense of place）」[36]という概念の持つ問題点と共通している。プレッドによれば，「場所の感覚」という概念は，歴史的に固有な権力関係や社会的，経済的な制約が行為や思考に影響を及ぼす側面への考慮を欠いており，自律的な精神の活動の産物であるかのような印象を与えてしまう点で問題がある。つまり，先に見た「構造化論学派」同様に，時空間的な固有性やその制約的側面が軽視されているというのである。そこでプレッドは，構造化論学派の考え方と「場所の感覚」という概念を，ともに時間地理学の枠組みの中に置き直すことによって，この「欠点」を克服しようと試みる。すなわち，ある個人の「場所の感覚」は，特定の時空間において彼／女の描くライフパスにおいて形成されると考えることによって，そのようなライフパスを取り巻く様々な物的ないし制度的制約が，「場所の感覚」の形成に影響を及ぼすと，プレッドは考えるのである（Pred 1983: 47-54）。この枠組みにおいて，「場所の感覚」という主体／主観に関わる側面と，物的・制度的制約という客体に関わる側面とが統合されうるのだ，とプレッドは考えている[37]。プレッドが主客二元論を乗り越えようとする構造化論者の精神を受け継ぎつつ，その「欠点」を克服しえたと自負するのはこの点においてである[38]。

さて，このようなプレッドの議論には，構造化論を越えて，理論的な研究一般に対する人文地理学者のある姿勢が反映されている。彼は，構造化論が，「場所の感覚」という概念や時間地理学と同様に，社会理論を構築する際に利用可能なオプションの一

つである，と認識している。より一般的に言えば，社会理論は，プレッドにとっては経験的な事象を解釈したり分析したりするための取捨選択可能なツールなのである。彼は別のテクストでギデンズに関して次のように言っている。

> 彼［ギデンズ］自身は，社会の時空間構成のいかなる具体的な事例…も検討していない。したがってギデンズを乗り越えるもっとも重要な手段は，実践の理論化を越えて理論の実践，理論を踏まえた経験的調査，…，具体的な状況・実際の行為者・現実の諸関係の解釈へと至るものである。このような意味でギデンズを乗り越えることは，…，ギデンズがその一部をなすようなより広範な言説に，実践的に関与すること…をこそ意味するのだ（Pred 1990: 30）。

要するに，構造化論にせよプレッドの枠組みにせよ，理論とは研究者が取捨選択することが可能な，一種の道具である（したがって研究者は理論から自由である），という認識がここにはある。

さて，以上のようなプレッドの立場に対してギデンズはどう反応したのだろうか。前章までの議論とも絡めながらギデンズの対応を詳しく検討してみよう。

（2）ギデンズのプレッドへの応答

ギデンズはプレッドに対するコメントの冒頭において，時間地理学に対し，社会的行為の環境を行為の単なる「容れ物」と見なしがちな社会学の傾向の見直しにつながるとして，一定の評価を与えている（Giddens 1983: 77）。しかし，次の瞬間，「時間地理学は，プレッドが示唆しようとするほどには，構造化理論と容易に結びつけられるとは思えない」として，時間地理学やプレッドの論考を肯定的に評価することを留保する。ギデンズは次のように述べている。

> 文脈は，私の考えによれば，常に行為の文脈性（contextuality）としてある。そして，われわれが「時間」や「空間」という言葉を十分な吟味もなく受け入れるのであれば，社会理論において行為の文脈性にうまくアプローチすることはできない。ここで，時間と空間は存在者の容れ物であるという想定に対するハイデガーの批判が重要となる。ハイデガーにおいては，現前ーそれは無から存在が生じるような「現前化（presencing）」として理解されるーが，「今（nows）」の無限性としての「現在（present）」に取って代わる。時空間は，もはや，「計算された時間における二つの今-点（now-points）」の隔たりを意味しない。それは「到来（futural approach）［と過去と現在］が相互に届け合うようにして開かれ空いたところを名指したものである」（Giddens 1983: 78）[39]。

そして，プレッドが「場所の生成（becoming of place）」，すなわち「絶えることない構造化のプロセスの流れへの，人々の能動的な関与」について語っていることに共感を示しながらも，このことは「プレッドが考えていると思われる以上に，ヘイエルストラント（Hägerstrand, T.）のアプローチ［つまり時間地理学］をラディカルに刷新することを意味する」（Giddens 1983: 79）[40]と述べている。

また，人文地理学者にとってなじみ深い用語である「場所」という語に関して，ギデンズは次のように述べている。

> 私は，相互作用にかかわる物理的な舞台状況を示す言葉として，この言い方［場（locale）］を「場所」という言い方よりも好んでいる。なぜなら，「場所」は往々にして空間における一定の点や面としてみなされるからである。そのような見方は，私の考えでは，時間を「今（nows）」の連続とみなす考え方と結びついている（ibid.）。

このようなギデンズの批判の基盤には構造の二重性の考え方があり，ギデンズはこの考え方を思いつくにあたって，「細胞生物学における自己再生産システムへのアプローチ」，つまりオートポイエシスにおける自己言及の考え方から影響を受けたことを認めている（ibid.）。つまり，ここでのギデンズの応答はⅡで確認した観点からなされているといってよい[41]。そしてギデンズが異議を唱えているのは，プレッドが直接論じていることよりも，むしろ，プレッドが「十分な吟味もなく受け入れて」（Giddens 1983: 78）しまっている考え方に対してである。その考え方とは「時間」＝再帰的自己規制の考え方に他ならない。

「時間」と再帰的自己規制とは互いに結びついているが，ここではそれぞれに対する批判を便宜的に分離して，先に紹介したプレッドの議論との関係で

展開してみよう。まずは，「時間」批判であるが，これは時間地理学の前提にある時空間認識に対する批判に他ならない。プレッドの試みは時間地理学の枠組みを維持しつつ，ギデンズの理論を取り込もうとするものであった。しかし，プレッドが依拠した時間地理学の背後には，いかに研究者が直接それについて語らなかったとしても，そこに物的制約条件やライフ・パスが描きこまれるような「所与の時空間」が存在してしまう。そして，このような時空間マトリックスにおいて，「時間」は「線」としてイメージされる。ここには時間があるように見えて，実は時間が無い。時間地理学が考慮しているのは，あくまで線という形で「空間」化された「時間」である。プレッドは，行為と構造の関係を，同時的に相互規定しあうような，「弁証法的」関係として解釈していた。しかし，プレッドはその「同時性」を，時間地理学的な観点に基づいて線的な時間上の「今」として考えていたのであって，過去や未来が現在とともにあるという意味での「同時性」は認識されていないのである。

プレッドが指摘するように，ギデンズは確かに物質的なレベルで考えた空間の連続性や制約性の考察を重視していない。しかし，これは「時間」「空間」の自明性を括弧に入れることによって，時空のレベルをあぶり出すための仕掛けだったと考えることができる。これに対してプレッドの観点においては，ハイデガーが批判するように，時間が無限に広がる「今」の連続とみなされることになり，先に確認したような時空のパラドクスに対しては，判断停止せざるをえない。プレッドが保持する枠組みでは，ギデンズが問題化しようとしていたことは問題化することさえできないのであり，そういった点からギデンズはプレッドの試みのナイーブさを皮肉交じりに批判していたのである。

次に再帰的自己規制への批判であるが，これは理論と経験的研究，理論と実践との関係についてのプレッドの姿勢に対する批判として理解できる。先に引いた Pred（1990: 30）における「『実践の理論化』から『理論の実践』へ」という主張に象徴されているように，プレッドにおいては，客観的理論と主体的実践は分離されており，それが「弁証法的」に相互作用している。しかし，ギデンズの理論の核心は，再帰的モニタリングの視点から再帰的自己規制の視点を相対化することにこそある。その意味で，ギデンズにとっては実践をラディカルに理論化すること自体が批判的実践であったのであり，そのような実践自体が同時に批判対象として理論に回収されるという構造をもっている。つまり，ギデンズの理論の場合，理論と実践との間にも相即的な関係が成立しているのであって，それは抽象的理論と経験的分析との二元論で理解されてしまうような種類の理論ではない。むしろ，ギデンズの理論は，そのような二元論的認識に絶えず疑いの目を向けさせる。したがって，ギデンズの理論をより批判的に読むならば，われわれは「理論」を，絶えず自らの実践を自己批判的に問い続けるような「実践」として捉えなければいけなくなる。

こうしてみると，理論と実践の二元論を全く疑うことなく，ギデンズのテクストを「経験的な研究」という実践に直ちに援用しようという試みは倒錯的であるといわざるをえない[42]。単に抽象的理論と経験的分析（あるいは理論と実践）の統合に関心があるだけならば，プレッドらはギデンズに言及しなければいけない理論的必然性を持っていなかったことになる。人文地理学におけるギデンズの受容の一端は，単なる「流行」であったといわざるをえない[43]。

ギデンズに対するプレッドの態度は「空間」の固有性や物質性へのこだわりによって支えられていた。これは人文地理学者にとっては宿命的なことかもしれないが，ギデンズのテクストを読む上では，この態度が裏目に出てしまったように思われる。いかに経験的な世界と「空間」の結びつきが当然のものに思われようとも，それが単に自明の前提として持ち出されるのであれば，人文地理学の知が社会科学として批判的な意義をもつことはない。Thrift（1999: 295-296）にあやかるならば，そのような当たり前の感覚を放棄して初めて，人文地理学は社会科学としての価値を帯びるのである。筆者は先にエンデの物語に表現されている時間認識を紹介した。そこには，われわれが自明視する「時間」認識だけでなく，それと表裏一体となった現代社会の抱えるさまざまな問題に対する寓意と批判が満ちている。ハイデガーに言及しつつプレッドを批判したギデンズも，エンデと同じような警告を人文地理学者に向かって発

していたのだ，というのは言い過ぎだろうか。

V　むすび

ここまで明らかにしてきたギデンズの批判は，長らく人文地理学のテクストにおいて黙殺されてきたように思われる。これは，すでに指摘したが，1993年時点での人文地理学辞典の構造化理論の項目に象徴されている。

本稿は人文地理学とギデンズが初めて接触を持った時期の著作を中心に検討してきたが，最後に近年の動向にも若干触れておこう。1990年代以降，ギデンズと人文地理学とのつながりは，表面的には薄れたように見える。しかし，より広い文脈において注意深く検討してみると，一部の人文地理学者とギデンズとの理論的距離は，むしろ接近しているともいえる[44]。例えば，スリフトは本稿に比較的近い立場からギデンズを再評価する短い書評論文を 1993 年に著している。そして，その後スリフトが精力的に展開している理論においては，本稿がギデンズを通じて明らかにしたものと共通する時空認識がうかがえる[45]。

人文社会科学と政治の関わりや，人文地理学の持つ政治性が問題とされることがますます多くなってきている。そのような中で，本稿が明らかにした時空認識が，これら近年の人文地理学の理論的成果やギデンズの政治論（Giddens 1991, 1994; ギデンズ 1999）などとどのように関係しているのかを詳細に検討することは，われわれ自身の知的実践を根本から反省するきっかけになるだろう。

地球規模での環境破壊や経済的不安定から日常的なレベルでの差別やアイデンティティ・ポリティクスの問題まで，近代の矛盾の象徴ともいうべき今日的な社会問題がますます深刻になりつつある。しかし，それらに対抗しうるような「実践」のイメージは，主客二元論を無批判に再生産するような言説実践からは生れてこない。このような反省から近年では，従来の二元論的認識枠組みにとらわれた「実践」とは異なる，新たな実践の可能性を模索する動きが，様々な学問分野の垣根を超えて横断的に生じている[46]。そして，本稿で読み解いた時空は，そのような新たな実践のイメージと不可分の関係にある。したがって，ギデンズが構造化理論の後に近代論や政治論へと向かっていったことには，ギデンズなりの内的論理があってのことである（なぜなら，政治とは，最も広い意味で捉えるならば，諸実践間の調整に他ならないから）。筆者は，このような点にこそ，地理的知と政治の新たな結節点（言い換えれば，政治地理学の可能性）を積極的に見出したいと考えているが，より踏み込んだ議論は別の機会に委ねることにしたい。

注

1. 構造化理論に関して論じられている代表的な著作は，Giddens（1976, 1979, 1981, 1984, 1987）などである。なお本稿でギデンズのテクストから引用する場合，邦訳のあるものについては，参照箇所は訳書の方のみ記している。
2. 社会科学の長い歴史の中で，個人と社会との関係をいかにして捉えるかということは，常に大きな難問として立ちはだかってきた。社会を考える際に，社会が個人によって能動的に構成される側面を強調する立場を「主観主義的」，逆に，社会が個人を規制し制約する側面を強調する立場を「客観主義的」と表現することができるだろう。「行為」は，この二元論のうち，「主観主義的」側面と，また「構造」は「客観主義的」側面とおおむね対応している。
3. 時空間という語は，「時間＋空間」という形での両者の融合をわれわれに想起させるが，これは両者が実体的に分離されているかのような印象を与えてしまう。このように時間と空間を分ける立場は，カント以来の学問・思想的伝統であるが，ギデンズ（1998: 193-226）によって徹底的に批判されている立場でもある。本稿ではこのような考え方を相対化するために，これ以降，ギデンズの用いた time-space の訳語として時空という語を用いることにする。岡田（1993; 1994; 1996a; 1996b; 1997; 2000）の一連の論考と同様に，時空においては，そもそも「時」と「空」とが分けて考えられる以前の水準が含意される。逆に，本注冒頭で記したように，「時」と「空」の分離を前提として，その上で両者を融合させた概念を，本稿では「時空間」と呼ぶことにする。
4. 英語圏の人文地理学辞典における，構造化理論についての項目（Gregory1993: 600-603）に，このことが象徴されている。ここではギデンズの歩みが，構造の二重性という考え方に基づいた主客二元論批判によって特徴づけられる第一期と，唯物論批判と社会の時空間構成の考察

を特徴とする第二期とに整理されているのみである。

5. 人文地理学において 1990 年代以降にギデンズのテクストを対象としているテクストは，1980 年代に比べて格段に少ないが，Hannah and Strohmayer（1991）や Thrift（1993）などがある。本稿で明らかにする論点は，これらのテクストを的確に評価する上でも不可欠である。

6. ここで，人文地理学という語を一枚岩的に用いることには問題があるかもしれないが，さしあたって「地域，場所，景観，環境，空間など，何らかの意味で『空間的』とでも表現されるような観念を拠り所として，人文社会現象を考察する知の形態」として，人文地理学を定義しておく。またこれ以後，このように人文地理学の固有化に貢献してきた諸概念の総称として，鉤括弧付きの「空間」を用いたい。このような学問間の分業を正当化する装置としての「空間」は，ギデンズが指摘するように，時間とは分離されて概念化されている（ギデンズ 1998: 195）。

7. ただし，本稿で敷衍していく時空に対する視点は，当のギデンズ自身のテクストにおいては必ずしも徹底されていなかったり，直接的には語られていなかったりすることが多い。このことが，彼の理論をあいまいなものとし，人文地理学者を誤解させた一因であるように思われる。したがって，ギデンズが直接言及しなかったテクストをも手掛かりにしつつギデンズを再評価する本稿の議論は，ギデンズ批判でもある。

8. Thrift（1999: 295-296）は，場所という概念が社会科学において重要となる可能性は，われわれが常識的な感覚を捨てたときにこそ開かれると指摘する。本稿でもこのような精神を引き継ぎ，時空について，これまで地理学者の常識的な感覚ゆえに見過ごされてきた議論に徹底的して注目することにしたい。

9. ここでの空間とは大澤とスペンサー=ブラウンの用語であり，存在者が存在する領域を意味する（大澤 1991: 105-113）。

10. 例えば，道に迷って地図を片手に自分の居場所を確かめようとする時，われわれは地図を地図として対象化している。そして同時に，地図は，「居場所を確かめる」という行為にとって「妥当なもの」として対象化されている。逆に，このとき対象化されることのないもの（例えば腕時計）は，「居場所を確かめる」行為にとっては妥当でないものとして区別されていることになる。

11.「居場所を確かめる」行為にとって妥当なものとして地図を対象化することは，「居場所を調べる時に地図を見る」という行為を「妥当なもの」として，その他の「妥当ではない」行い（例えば，居場所を調べるのに時計を見ること）から区別することになる。

12. ここでの事例に従って「規則」を具体的に表現すれば，「地図は，自分がどこにいるかを確かめるためのものである（と考えるのが妥当である）」，あるいは「自分がどこにいるかを確かめる時には地図を見る（のが妥当である）」などが考えられる。

13. 論理的には，「何が地図であって何が地図でないか」の区別が決まっていなければ，地図を地図として対象化することができない，ということになる。

14. 例えば，道に迷って地図を手にするとき，われわれはすでにして，「その地図は自分の空間的位置を示すものである（が今いったい何時かまでは示してくれない）」という規則を前提にしている（つまりそのことを当然のごとく自明視している）。この時さらに，「『地図』とは，一般に地表上のどこかしらを表現した一種の『図』である（が『絵』とは異なる）」ことが，さらに「地図や絵は一種の視覚的表現である（が同じ視覚的表現でも文章的表現ではない）」こと…が自明視されている。「何が地図であって何が地図でないか」を区別する際に前提とされる自明視された条件は，これ以外にいくらでも列挙できる。道に迷って地図を手にするとき，われわれはこのような無数の条件が現に妥当かどうかをいちいち判断しているわけではなく，これらが既にして成り立っていることにしてしまっているのだ，ということになる（逆に，こういった無数の条件が自明視されて意識されないからこそ，われわれは道に迷ったときに，「そもそも地図とは何か？」などという問いを発しないで済むのである）。

15. 地図を地図として区別するような規則や，道に迷った時には地図を見るのが妥当であるとするような規則は，道に迷って地図を見る行為が成立する条件であるが，これらの規則はその行為と同時に成立している。

16. ここで無限連鎖に陥るという困難は回避されたかに見える。だが，このような状態は「想像的状態」にすぎず，ここにはまた別のパラドクスが顔を見せている。そしてこのパラドクスについて考えるには，実は時間についての考察が必要となるということをスペンサー=ブラウン（1989: 67-68）は指摘している。これについては後に検討する。

17. ただし［ ］内は引用者による挿入。なお，これ以降の引用文も同様に，［ ］内は引用者による挿入とする。

18. 大澤（1999: 102-103）は，ギデンズよりも直接的に指し示しの算法をウィトゲンシュタインと結びつけて解説している。

19. Curry（2000: 89）は，社会理論家が第一章でウィトゲンシュタインの重要性を強調しているのに，人文地理学者は第二章以降しか自分の研究に応用してこなかった，と皮肉交じりに指摘している。

20. 構造と規則は，ともにギデンズの理論においては「客観主義的」なものとして把握されている。また，構造を資源といいうるのは，それが行為を媒介する，つまり行為を「可能にする」側面があることによる。

21. 強調は原著者による。これ以降も，特に断りのない限り，同様とする。なお，規則および規則に従うことについてのパラドクスとは次のようなものである。規則は行為の仕方を決定できない。なぜなら，いかなる行為の仕

方もその規則に合致させられうるから。しかし，それならばいかなる行為の仕方もその規則に違反させられうるというのも真である。ゆえに行為と規則の間には一致も不一致もないことになる（Wittgenstein1981: 81〔§201〕）。

22. 本稿では，行為主体の能動性をやや強調するときに「行為」ではなく「実践」という言葉を用いることがあるが，基本的には，両者を理論的に区別していない。つまり両者の差は修辞上のものである。なお，ギデンズ自身も，特に両者の厳密な区別をしていない。

23.「」内は前後の文脈から判断してウィトゲンシュタインの言葉と思われるが，出典は不明。

24. 地図を地図として区別するような規則，つまり「地図」の意味（あるいは「何が地図であるか」ということの表現）が，地図を見る行為のどこか外にあるのではない。地図を地図として区別するような規則は，道に迷って地図を手にするその行為に不可欠の一側面である。

25. 再帰性が，当初再帰的モニタリングと呼んでいたものの言い換えであることは，ギデンズ（1993: 53）で明言されている。

26. 行為と構造の相即的，自己言及的な関係を，構造の側から表現すれば構造の二重性，逆に行為の側から表現すれば再帰的モニタリングとなる。こういった観点から，冒頭で述べたように，両者は「表裏一体」の概念となっているのである。

27. 近代社会においては，主体や客体といった概念が既にして自明視されており，それらを基盤にして社会が構成されている。逆に，これらが前提とされずに構成されている社会においては，再帰的自己規制のような形での「主体」と「客体」の関わり方は自明なことではない（大澤1992 を参照されたい）。

28. これまで「時空間」と表記してきた概念が，ここでいう「時間」と「空間」とを再度統合した概念であることはいうまでもない。

29. McTaggart（1988）の論証の骨子は以下のとおりである。まず，時間に関する言明には二つの系列―「事件 X が『過去』『現在』『未来』のいずれかである」とする系列 A,「事件 X は『事件 Y 以前』『事件 Y と同時』『事件 Y 以後』のいずれかである」とする系列 B―がある。系列 B に関する事実は恒常的に成立してしまうため，「変化」の可能性を許容しない。したがって，「変化」を本質とする時間は，結局系列 A に関わる事実である。そして，時間が実在するためには，全ての実在する出来事に関して「過去である」「現在である」「未来である」のうち，二つ以上が成立しなければならない。しかし，「過去である」「現在である」「未来である」は相互排他的であり，両立不可である。ゆえに，（実在の出来事を時間的な関係において捉えると矛盾が生じるため）時間は実在しない。

30.「いまだなお現在ではないものとしての到来が，同時に，もはや現在ではないものとしての過去をもたらし，そしてまた逆に，過去はそれ自身を未来へ届ける。双方の相互関係が同時に現在を届け，現在をもたらす」（Heidegger 1972: 13）。

31. Giddens（1983: 78）においてこの二つの語はほぼ同義に用いられている。

32. マクタガートの系列 B も，再帰的自己規制と本質的に関連する近代社会に固有の観念であるといえる。ギデンズ（1998: 197）は，時間の空間的な把握（ある線上における先-後ないし前-後として時間を見る態度）は，必ずしもあらゆる社会にとって普遍的な現象ではないと指摘している。

33. これ以前のギデンズの著作で人文地理学に言及があるもの（ギデンズ 1989 = Giddens1979 など）においては，時間地理学への言及はほとんど見られない。

34. Soja（1989: 139）においても同様に構造化理論の考え方が「弁証法的」であると表現されている。

35. マルクス主義地理学の立場から物的空間の持つ制約的側面を強調する Soja（1989: 146-147）も，プレッド同様，「空間」に関する概念の扱いが不十分であることをギデンズの理論の難点として取り上げている。

36.「場所の感覚」とは，「場所」に対する人間の愛着や共感（あるいはその逆に疎遠感や無関心）などのことである。それは，いわば場所の物的対象としての側面ではなく主観的側面を強調した表現である（Cosgrove 1994）。

37. この点で，プレッドの理論は，1970 年代の末に人文主義地理学者のレイ（Ley, D.）と構造化理論を評価するグレゴリーの間に起きた論争を意識しつつ，グレゴリーに近い立場から組み立てられたものであるといえる。

38. 特に，プレッドが構造化論者の一人と目するウィリアムズ（Williams, R.）の「感情の構造（structure of feeling）」という概念と，自ら提示した枠組みとの照合が試みられている（Pred 1983: 54-64）。

39.「」内は，Heidegger（1972: 14）からの引用である。このハイデガーの引用文中の［］内は，ハイデガーのテクストにはあるが，ギデンズの引用では省略されている。

40. 強調は泉谷による。この部分は「プレッドの論考が何らかの可能性を秘めている」という「肯定的評価」ではなく，「時間地理学を無邪気に擁護しながら場所の『生成』（つまりハイデガーを意識した言葉）を語るプレッドは，問題の重大さを認識していない」という「皮肉」である。

41. スペンサー=ブラウンの代数は，バレーラ Varela, F. のオートポイエシス論やルーマン Luhmann, N.の社会システム論にとっても重要な理論的背景となっている。ギデンズ（1989: 81）も自己言及の論理に触れる際に，スペンサー=ブラウンだけでなくこれらの理論的成果にも言及している。また，時間についての認識に関して，プレッドと同じ特集号に寄稿していた生態心理学者ショッター（Shotter 1983）の議論に，ギデンズが親近感を示していることも興味深い（ショッターの議論はギブソン（Gibson, J.）のアフォーダンス論の流れを汲むが，ア

フォーダンスとオートポイエシスとの理論的な親和性と相違点に関しては河本（2000）を参照されたい。ギデンズがショッターに共感するのは，アフォーダンスの考え方とオートポイエシスの考え方が理論的親和性を持つ範囲内においてである)。

42. 最も典型的なのが, Moose and Dear（1986), Dear and Moose（1986）である。彼等の関心の対象は，経験的分析への応用を通じて構造化論の理論的な価値を吟味することにあった。

43. ギデンズのテクストが経験的分析とは容易に相容れないにもかかわらず，人文地理学においてはそれがあたかも経験的分析を理論的に裏付けるものとして消費されてきたことに対する批判として, Hannah and Strohmayer（1991）がある。

44. ただしこの接近の以前に，Hannah and Strohmayer（1991）のような，人文地理学における過剰な構造化理論ブームに対する拒絶反応とも取れる反動的批判があったことを忘れてはならない。ギデンズと人文地理学者の一部の再接近は，彼らによる「ギデンズの脱構築」（Hannah and Strohmayer 199: 309）を一度通過したものであることを念頭に置く必要がある。

45. また，ローズ（Rose, G.）は，フェミニズムという全く異なる文脈で，地理学的知の限界を自己反省的に明らかにしていく実践の必要性を痛切に認識していたが，彼女も本稿で展開したような時空認識に注目している（Rose 1999)。彼女とスリフトが最近理論的な接近を見せつつあることも興味深い。

46. Thrift（1996, 1999）はこのような実践の理論を便宜的に「非表象理論」と称している。

文献

Cosgrove, D. 1994. Sense of place. In *The dictionary of human geography（third edtion）*, eds. R. J. Johnston, D. Gregory, and D. M. Smith, 548-549. Oxford: Blackwell.

Curry, M. R. 2000. Wittgenstein and the fabric of everyday life. In *Thinking space*, eds. N. J. Thrift and M. Crang, 89-113. London: Routledge.

Dear, M. J. and Moose, A. I. 1986. Structuration theory in urban analysis: 2. empirical application. *Environment and planning A* 18: 351-373.

ダメット, M. 著，藤田晋吾訳 1986.『真理という謎』勁草書房（Dummett, M. 1978. *Truth and other enigmas*. London: Gerald Duckworth).

エンデ，M. 著，大島かおり訳 1976.『モモ』岩波書店（Ende, M. 1973. *Momo*. Stuttgart: Thienemanns Verlag).

Giddens, A. 1981. *A contemporary critique of historical materialism*. London: Macmillan Press.

Giddens, A. 1983. Comments on the theory of structuration. *Journal for the Theory of Social Behaviour* 13: 75-80.

Giddens, A. 1984. *The constitution of society: outline of the theory of structuration*. Berkeley: University of California Press.

ギデンズ, A. 著，松尾精文・藤井達也・小幡正敏訳 1987.『社会学の新しい方法基準―理解社会学の共感的批判』而立書房（Giddens, *A. New rules of sociological method*, Hutchinson, 1976).

ギデンズ, A. 著，友枝敏雄・今田高俊・森　重雄訳 1989.『社会理論の最前線』ハーベスト社（Giddens, A. 1979. *Central problems of social theory*. Berkeley: University of California Press.).

Giddens, A. 1991. *Modernity and self-identity: self and society in the late modern age*. Stanford: Stanford University Press.

ギデンズ，A. 著，松尾精文・小幡正敏訳 1993.『近代とはいかなる時代か？―モダニティの帰結』而立書房（Giddens, A. 1990. *The consequence of modernity*. Cambridge: Polity Press, Giddens, A. 1990. Modernity and utopia. *New statesman & society* 125: 20-22.).

Giddens, A. 1994. *Beyond left and right: the future of radical politics*. Cambridge: Polity Press.

ギデンズ，A. 著，藤田弘夫監訳 1998.『社会理論と現代社会学（社会学の思想 1)』青木書店.（Giddens, A. 1987. *Social theory and modern sociology*. Cambridge: Polity Press).

ギデンズ，A. 著，佐和隆光訳 1999.『第三の道―効率と公正の新たな同盟』日本経済新聞社（Giddens, A. 1998. *The third way: the renewal of social democracy*. Cambridge: Polity Press).

Gregory, D. 1994. Structuration theory. In *The dictionary of human geography （3rd edtion）*, eds. R. J. Johnston, D. Gregory and D. M. Smith, 600-603. Oxford: Blackwell.

Gregory, D. 2000. Structuration theory. In *The dictionary of human geography （4th edition）*, eds. R. J. Johnston, D. Gregory, G. Pratt, and M. Watts, 798-801. Oxford: Blackwell.

Hannah, M. and Strohmayer, U. 1991. Ornamentalism: geography and the labor of language in structuration theory. *Environment and Planning D: Society and Space* 9: 309-327.

Heidegger, M. 1972. *On time and being*. New York: Harper and Row.

河本英夫 2000.『オートポイエーシス 2001―日々新たに目覚めるために』新曜社.

McTaggart, J. and McTaggart, E. 1988（1927）. *The*

nature of existence (vol. 2). Cambridge: Cambridge University Press.

Moose, A. I. and Dear, M. J 1986. Structuration theory in urban analysis: 1. theoretical exegesis. *Environment and planning A* 18: 231-252.

岡田宏太郎 1993．アンソニー・ギデンズ「構造化」理論についての一考察（一）―社会的行為と時間・空間の問題を中心に．名古屋大学法政論集 151: 187-228.

岡田宏太郎 1994．アンソニー・ギデンズ「構造化」理論についての一考察（二）完―社会的行為と時間・空間の問題を中心に．名古屋大学法政論集 152: 227-265.

岡田宏太郎 1996．アンソニー・ギデンズの行為理論・社会システム論（一）―政治の概念をめぐって．名古屋大学法政論集 165: 143-182.

岡田宏太郎 1996．アンソニー・ギデンズの行為理論・社会システム論（二）―政治の概念をめぐって．名古屋大学法政論集 166: 341-377.

岡田宏太郎 1997．アンソニー・ギデンズの行為理論・社会システム論（三）―政治の概念をめぐって．名古屋大学法政論集 171: 415-454.

岡田宏太郎 2000．アンソニー・ギデンズの行為理論・社会システム論（四）―政治の概念をめぐって．名古屋大学法政論集 182: 343-385.

大澤真幸 1991．スペンサー=ブラウンの算法とその含意．現代のエスプリ 287: 105-113.

大澤真幸 1992.『身体の比較社会学Ⅱ』勁草書房.

大澤真幸 1994.『意味と他者性』勁草書房.

大澤真幸 1996.『性愛と資本主義』青土社.

大澤真幸 1999.『行為の代数学―スペンサー=ブラウンから社会システム論へ（増補新版）』青土社.

ポラニー，M. 著，佐藤敬三訳 1980.『暗黙知の次元―言語から非言語へ』紀伊国屋書店（Polanyi, M. 1966. *The tacit dimension*. Gloucester, Mass.: Peter Smith）.

Pred, A. 1983. Structuration and place: on the becoming of sense of place and structure of feeling. *Journal for the Theory of Social Behaviour* 13: 45-68.

Pred, A. 1990. *Making histories and constructing human geographies: the local transformation of practice, power relations, and consciousness*. Boulder: Westview Press.

Rose, G. 1999. Performing space. In *Human Geography Today* eds. D. Massey, J. Allen and P. Sarre, 247-259. Cambridge: Polity Press.

Shotter, J. 1983. '"Duality of structure" and "intentionality" in an ecological psychology', *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 13, 1983, pp. 19-43.

Soja, E. W. 1989. *Postmodern geographies: the reassertion of space in critical social theory*. London: Verso.

スペンサー=ブラウン, G. 著, 大澤真幸・宮台真司訳 1987.『形式の法則』朝日出版社（Spencer-Brown, G. 1969. *Laws of form*. London: Allen & Unwin）.

Thrift, N. 1993. The arts of the living, the beauty of the dead: anxieties of being in the work of Anthony Giddens. *Progress in Human Geography* 17: 111-121.

Thrift, N. 1996. *Spatial formation: theory, culture and society*. London: Sage.

Thrift, N. 1999. Steps to an ecology of place. In *Human Geography Today* eds. D. Massey, J. Allen and P. Sarre, 295-322. Cambridge: Polity Press.

Wittgenstein, L. 1981（1953）. *Philosophical investigation*. Oxford: Blackwell.

付記

本稿の執筆に当たっては，平成 12・13 年度文部省科学研究費補助金（特別研究員奨励費 3416）の一部を使用した。